从三到万

北 基行 訳

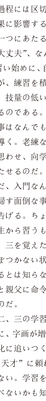
紹興　魯迅記　叢書風景

三から万へ

習い事に近道はないか？　習い始めの者がよくこの質問をする。絵論で答えることができない。できるか、できないか決めてからのちよくない。どんな人が、何を学ぶのか、どんな方法で学ぶか、それぞれに則して検討するべきである。学問は一滴一滴積み上げるもので、特に初学者は先を急ぐことは宜しくない。

そもそも“文化”という語は、西洋では一語で、本来は積み重ねるという意味である。中国古代の読書人は、すでに順序を追って学ぶことの大切さを知っていた。これは、一般学習理論に合致する正しい方法である。学習は、理解力と記憶力がともなわないと、進まない。しかも理解力と記憶力がいくら優れていても、習いたての理解と記憶では、役に立たず、一定の時間的経過を必要とする。できの悪いのが、なんでもかんでも急いで学ぼうとすると、必ず大失敗をしでかす。

おなじような故事が明清の本に載っており、いずれもこの種の人間を痛烈に批判している。この故事の内容を一口で云うと、“田舎の翁有り、家貧般盛（いんせい）なれども、累世之平を識（しょう）らず。一（ある）晩、楚士を聘して其の子に講（おしょう）えしむ。楚士之を講えるに皆を撂（とぉ）り来に臨む。一画を書して、講じえ日く、一字。二画を書して、講じえ日く、二字。三画を書して、講じえ日く、三字。その子瞿（すかぁ）ち欣欣然として、筆を擲（なげぅ）ち帰り其の父に告げて曰く、見得たり。先生を煩わし、館穀を損ずること無からべし。謝して去らしむるを請う。その父喜び、之に従う。然る具し謝して楚子に遣はしむ。時遊（すぅ）ぎ、その父朔及の萬氏を微召し飲ましめ、子に最（あさ）より狭を治めしむ、之を久しくして成らず。父之を趣（うながぁ）す。其の子恚（うらぅみ）で曰く、天下に姓氏伙（おおぅ）し、姓萬は奈何（いかんぁ）せん。晨（あさ）起きてより今に至り、才（やっ）と五百画を完（おわ）るなり。”



北京　紫禁城　路上風景

通俗的でわかりやすいので、漫才師が演じたこともある。笑い話として語られ、風刺性に富んだ話として真面目に取り上げる人は少ない。

私はこの話を別の角度から眺めて、この故事から教訓をくみ取りたいと思う。

学習過程には区切りとなる節というものがあり、この節目を上手に乗り越えないと、学習成果に影響する。一、二、三とかが国語のA、B、Cを習い始めたころがその重要な節の一つにあたる。金持ちの息子のように、習い始めに“舞い上がる”と、もう“大丈夫、大丈夫”、なんでも出来ると思うようのである。空手家にもそんな時期があるそうだが、習い始めに、自分はたいしたものだという気がして、腕がむずむずするのである。ところが、練習を積み、実力がついてくると、却って謙虚になる。これより分かりの通り、技量の低い人ほど、思い上がり傾向が強いが、腕が上がれば上がる程、人は謙虚になるのである。

習い事はなんでも、習う順序があって、先生は、入門者を易しいところから徐々に深みに導く。老練な先生は、入門者に、これはいけないと思わせ、向学心を引き出し、どんどんと自信をもたせるのだ。ところが、まちがって俺は出来るのだ、入門なんかくそくらえとなると、先生を迫い寄す面倒な事態となり、学び側はそれで終わりを告げる。ちょうど、金持ちの息子がそうで、もう先生から習うものはないと思った。ところが、一、二、三を覚えた程度は、“六書”の最低知識にもおぼつかない状態であるのに、本人は入門段階にあるとは知らなかった。親友に一通の招待状を書けと親父に命令されて、そこで息子は、うろたえたのだ。

紹興　魯迅　博物館

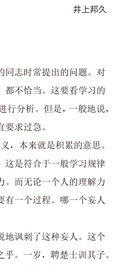
一、二、三の学習段階は大変易しい。問題は三から万に、字画が増えると変化が現れてくる。理解が、この変化に追いつくには、どんな知識も同じであるが、“天才”に頼れればなんでも学べるというものではない。学習をし、先生の指導が必要である。世の中に先生がなかったなら、なにも学べないかも知れない。先生の効用を重視する必要性はここにある。

私達が知らないことはまだまだ多く、虚心思慎に学習することが急務である。けれど、学習方法には、まだ解決されていない多くの問題が残っている。三から万までの故事は、この問題について我々に再考を促す契機を与えてくれているように思う。“舉一反三”という言葉がある。これは一を聞いて十を知ると意味であるが、我々の学習条件や環境をいかに整えていくか、この問題を契機に考えてみよう。

【 問題当時の時代考証と秘められたメッセージ 】

『從三到万』ひとそえ

続いて教育について、とりわけ学び始め（初学・入門）には謙虚な姿勢が大事であることを率直に書かれています。本篇での鄧拓先生は真っ直ぐな書きぶりだと思います。北光生が汚みに織り上げた日本語の文章を、そのまま素直に受け留めて頂ければ宜しいかと思います。



鄧 拓

鄧 拓（とうたく）(1912 年 2 月 26 日生～1966 年 5 月 18 日自死）は、解放前から共産党の新聞編集発行や情報宣伝部門に携わり、建国後に人民日報編集長や社長を務めました。三家村グループとして批判され、自死に到りました。関連する略年表を添えます。

1949 年	中華人民共和国成立
1956 年	毛沢東、百花斉放・百家争鳴を提唱。 ソ連でスターリン批判。
1957 年	前年に焚り出された批判勢力を粛清する 反右派闘争開始
1958 年	大躍進政策、人民公社化開始。国民党支配下の公門・馬祖島を砲撃。
1959 年	毛沢東は党主席に専念。劉少奇を国家主席に選出。彭徳懐失脚。
1960 年	中ソ論争、ソ連関係者引揚げ。大躍進失敗・食糧危機・餓死者多数
1961 年	北京晩報に『燕山夜話』連載開始。前線に『三家村札記』連載開始
1965 年	姚文元が共産党『海瑞免官』を批判し、文革の端矢となる
1966 年	人民日報が鄧拓・呉晗・廖沫沙の三家村グループを攻撃 毛沢東が四人組・紅衛兵を通じ、劉少奇・鄧小平らを名指し批判
1971 年	林彪、反毛沢東クーデターに失敗。国連に復帰。
1972 年	ニクソン大統領訪中。田中角栄首相訪中。国交正常化。
1976 年	周恩来・毛沢東死去。四人組逮捕。華国鋒が党主席継承。
1977 年	鄧小平復活
1978 年	姚文元『評海瑞免官』が批判される。経済改革・対外開放政策。 米中国交正常化。　彭徳懐の名誉回復。
1979 年	三家村グループ・『燕山夜話』『三家村札記』の名誉回復。再版。

井上邦久

从 三 到 万　原文

学习文化知识能不能走终南捷径呢？這是许多初学的同志时常提出的问題。对于这个问題的回答，不能过于笼统。一定说能成不能，都不恰当。这要看学习的是什么人，学什么，用什么方法等等，要按照具体情况进行分析。但是，一般地说，学文化应该一点一滴地慢慢积累，特别是初学的人不宜要求过急。

“文化”这个词几在外国文里是一个字；这个字的字义，本来就是积累的意思。我国古代的读书人，更早就重视循序渐进的学习办法。这是符合于一般学习规律的正确方法。因为学习不但要靠理解力，还要靠记力。而无论一个人的理解力和记忆力有多强，他要理解和记住图学会的东西，总要有一个过程。哪一个妄人如果想一下子就把什么都学会，其结果必定要吃大亏。

有一个故事在明清人的笔记中重复出现了多次，尖锐地讽刺了这种妄人。这个故事的梗概是说“有田舍翁，家资殷盛，而累世不识之乎。一岁，聘楚士训其子。楚士始训之搦管临朱。书一画，训曰：一字；书二画，训曰：二字；书三画，训曰：三字。其子辄欣欣然，掷笔自告其父，曰：儿得矣，儿得矣；可无烦先生，重费馆谷也，请谢去。其父喜，从之。具币谢遣也。逾时，其父拟征召烦友万氏者饮，令子晨起治状，久之不成。父趣之，其子恚曰：天下姓氏伙矣，奈何姓万！自晨起至今，才完五百画也。”

这个故事比较通俗易懂，有的相声演员也曾讲过。但是，人们大都只把它当做笑话，而不把它看成一个严肃的讽刺性故事。我的看法不是这样。我以为我们应该从这个故事中，吸取一些关于学习方面的经验教训。

对于一个人来说，学习过程中有若干重要的关节，如果处理不好，往往会影响学习的成绩。初学的一个最重要关节，就是在刚刚学会一、二、三或外国文A、B、C等等的时候。有一些轻浮的人，正如那个富翁的儿子一样，往往在这个时候就“欣欣然”起来，以为“得矣，得矣”，什么都懂得了。这也好象学打拳的人，刚学会几个动作的时候，多半以为自己很了不得，处处想跟别人较量几下子。倒是学得多了，真正有了一些本领，才反而虚心起来。由此可见，越是没有本领的就越加自命不凡；越是有本领的才越加谦虚谨慎。

从教学的过程来说，不管要学什么，教的人总要从易而难，逐步深入地把知识交给学生。因此，好的教师在开始的时候，应该给学生一个印象，觉得入门票不难，往后才能越学越有信心。而学生如果自命不凡，看到入门很容易，就把老师一脚踢开，那末，他就什么也学不成。正如那个富翁的儿子一样，他以为从此可不必再请老师了。殊不知他根本还不曾入门，只学会一、二、三，对于所谓“六书”等起码的知识一点也不懂，所以他父亲叫他给姚万的亲友写一个请贴，他就傻眼了。

实际上，一、二、三这三个字的确很好认，而从三到万，在文字结构上却经过了许多复杂的变化。要懂得这些变化，也好象其他各种知识一样，必须逐渐学习，并且需要教师指导，不可能只凭什么“天才”就可以很快学会的。如果完全没有人教，倒很可能什么也学不会。我们所以应该重视教师的作用，其理由也就在此。

我们不懂的东西还很不少，都迫切需要虚心学习。但是，在学习方面有许多问題，并没有得到彻底的解决。从三到万这个故事似乎对我们有一些启发。我们无妨以此为例，举一反三，想一想怎么样才能更好地加强我们的学习吧。

【語句解釈】

・舉一反三 ――　一を聞いて十を知る。